

機関番号：15401
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19520236
 研究課題名（和文）アンドリュー・マーヴェルと17世紀英文学における戦争と
 平和について
 研究課題名（英文）Andrew Marvell, War and Peace in 17th century English Literature

研究代表者
 吉中 孝志（YOSHINAKA TAKASHI）
 広島大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号：30230775

研究成果の概要（和文）：

アンドリュー・マーヴェルの両義的な文学を英国17世紀中葉の宗教的、政治的文脈の中で戦争正当化の論理および平和思想と関連付けて分析、考察した。前者に関しては清教徒の聖戦論、後者に関しては the Great Tew Circle の思想に繋がる寛容思想がマーヴェルに影響を与えていることが判明し、詩的表現の中にこの両者が混在するという知見を得た。

研究成果の概要（英文）：

I have examined Andrew Marvell's religious and political ambivalence in the context of mid-seventeenth century English literature, especially in its relationship with the theory of holy wars supported by the Puritans and with the tolerationism of the group of people called the Great Tew Circle, and I have concluded that both of these elements had a great influence on the shaping of Marvell's poetic expressions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	300,000	90,000	390,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は平成13年度から平成16年度の4年間、科学研究費の補助を受けて行った「17世紀英文学における宗教思想について」の研究成果を深化、発展させようとする基盤研究の第二段階であった。

清教徒革命の結果として17世紀の半ばに起こった政治・宗教的論争である

Engagement Controversy が、ある種の pacifism を生み出す契機となったという先の研究で得られていた知見は、17世紀の宗教戦争が現代に通ずる具体的な平和学の萌芽を宿していたと考えられる事例であった。また、平成17年度に出版された拙著『ヘンリー・ヴォーン詩集—光と平安を求めて—』では、その解説や注釈で、宗教詩人 Henry

Vaughan の作品に見られるキリスト教的反戦思想を既に指摘していた。本研究では、当時さらに政治、国際関係に具体的に関わった背景を有する、Andrew Marvell や John Milton のような他の17世紀文学作家においてその反戦思想や平和主義的思想が如何に実際の政治的駆け引きの中で機能していたかを明らかにするのが動機であった。

本研究の準備段階として、平成17年度日本英文学会中国四国支部第58回大会において吉中が呼びかけ、司会・講師を務めたシンポジウム「戦争と平和のレトリック—詩における個性と普遍性—」では、ミルトンを分析対象として、「天上の戦い—John Milton の *Paradise Lost* における聖戦について—」を口頭発表した。さらに『英語英文学研究』第50巻では、帝国主義との関わりで ‘An Exploding and Imploding cannon ball: The Implications of Columbus’s Egg in Milton’s *Paradise Lost*’ が具体的な本研究の端緒となった。

2. 研究の目的

思想史的には初期近代という時代範疇に属する17世紀英国の政治・宗教的に大きな思想変化の中で、文学作品がどのような表現上の変化を生じさせられ、そしてさらに重要と考えられるのは、当時、現代のマス・メディアが果たす役割を担っていた文学作品がどのように政治・宗教に影響を与えていたかを検証することが、本研究の全体構成の主要な軸であった。具体的には、英国の外交史に関わる文献と摂理、自由意志の概念に関わる宗教的文献の文脈の中で、政治と文学の接点をなす重要な作品を残したアンドリュー・マーヴェルの詩及び散文を分析対象としながら、現代の平和学に資することを目的とした。

また、ここでいう平和学に、本研究においては、2重の意味を持たせることもその目的の一部であった。勿論、オランダ、イギリスというプロテスタント国とスペイン、フランス、さらにはアイルランドというカトリック国との間の駆け引きを含む大きな国際関係が文学テキストに反映されるようなレベルでの戦争と平和に関する議論であると同時に個々人、もしくは小さなグループが作り出す平和、すなわち和解、協調、協力、友情関係と戦争、すなわち争い、反目、敵対関係という日常レベル、そして精神的レベルでの議論をも文学研究である限りは含み込みたいという思惑があったからである。

3. 研究の方法

政治・宗教の文脈で考察されたマーヴェルに関する先行研究を整理統合する。

また、合わせてマーヴェルとの間テキスト性が知られている王党派作家 Sir William

Davenant による叙事詩 *Gondibert* を反戦的主張の立場から、さらに Thomas Hobbes との関連での唯物論的史観とダヴェナントの脱・神話化した、脱・超自然的な叙事詩の展開と表現方法とを関連付ける視点から、分析対象とする。

また、同時代の Engagement Controversy で書かれたパンフレット文献を pacifism の見地から読み直しを行い、ダヴェナントを含めた王党派の文献に共通する平和思想を相対化する。

先の研究成果から王党派の詩作品の中に時間、特に世界の終末の時間を「計る」表現が数多くあることが判明したので、終末論の影響が大きかった17世紀の半ばにおいて宗教戦争を肯定、あるいは否定するために、この王党派特有の表現が如何に、特にマーヴェルのクロムウェルに関わる詩群の中で機能していたかについて分析する。

連合王国のブリティッシュ・ライブラリー、及びオックスフォード大学ボドリアン・ライブラリーで一時資料の閲覧、資料収集を行う。17世紀英国貴族たちの個人書簡、日記等に平和主義的思想や寛容主義の表現を調査する。基点となるのは、Cambridge Platonists から懐疑主義と慣用思想を受け継いだ所謂 The Great Tew Circle と呼ばれた作家、宗教家たちのグループの残した文献調査である。さらに、ダラム大学17世紀研究所での、他分野の17世紀専門家との研究者間協力を、主に夏季に開催される国際学会の研究発表において行う。

最終段階においては、「17世紀英文学における宗教思想について」行った際の研究成果の一つである「摂理」と「偶然」を含めた宗教思想と英文学の問題へ回帰し、戦争と平和に関する思想と表現が如何にマーヴェルの詩的表現の中で結実したかの知見を得る。

4. 研究成果

(1) 政治・宗教の文脈で考察されたアンドリュー・マーヴェルに関する先行研究の整理統合を行った。また、散文作品と詩作品への、今世紀に入ってから加えられた新たな文献学的注釈による知見を精査した。特に Nicholas McDowell による *Poetry and Allegiance in the English Civil Wars* は、Thomas Stanley を中心とする詩人たちの集まりが、マーヴェルの言説に関わっていると論を展開しており、平和主義、反戦論の視点からも興味深い知見を示唆するものであることが判明した。この観点から ‘To His Coy Mistress’ 論に修正を加えることが出来た。また、マーヴェルと同時代の別の学識者のグループである Lucius Cary, Lord Falkland を中心とする the Great Tew Circle が、清教徒革命の前後で宗教的寛容

主義を主張しており、その考え方が、John Hales や George Sandys らを經由してマーヴェルの寛容思想と詩的表現に影響を与えていることを論証することができた。

(2) 本研究の主たる対象であるマーヴェルとの関わりの中で重要な位置を占めながらも従来看過されてきた William Davenant の叙事詩 *Gondibert: An Heroic Poem* を精読し、その反戦思想の分析を完了した。この作品との関連で 'Upon Appleton House' 論を完成した。また、礼拝行為としての「祈り」が、イデオロギー上の差異を顕在化させる反面、「賛美」がイデオロギー上の敵対意識を反映させないものであるというダヴェナントの指摘が、マーヴェルの詩作品「バミューダ諸島」の中で『詩篇』が扱われる際に、どのように表現されているかを明らかにした。また、ダヴェナントが Ben Jonson を中心とする詩人グループに属していることから、the Great Tew Circle の思想家との交わりがあることを発見した。マーヴェルの周辺での個人的ネットワークを更に詳細に解明するための調査の必要性があると考えられる。

(3) 清教徒革命戦争前と戦中における王党派との対立、さらに、清教徒革命後のクロムウェル政権下における共和制支持者との確執の中で、クロムウェル支持派が非難、糾弾される際に、終末思想を含む「摂理」の概念がどのように変容し、詩作上の表現に影響を及ぼしているかを解明し、それを 'An Horatian Ode upon Cromwell' s Return from Ireland' に関する論文で発表した。

(4) 聖戦論の現代的表れの一例として現代新興宗教の一つであるモルモニズムが殺人と信仰との関わりをどのように表現しているかを文学的語りの理論を援用して考察し、口頭発表するとともに出版発表した。

(5) マーヴェルの同時代人であり、クロムウェル政府の同僚でもあった John Milton の戦争に対する意識を政治・宗教的観点から考察した論考を英国で開催された国際学会で口頭発表するとともに出版発表した。

(6) 17 世紀英国で戦争正当化のための論理が神学的、政治的にどのように構築されていたかについての明らかになった知見と、先回の科学研究費の補助を受けて行った「17 世紀英文学における宗教思想について」の研究成果の一つである「摂理」と「偶然」を含めた宗教思想と英文学の問題を統合させ、図書の形で出版するため印刷中である。この書物は、既に発表したものに加筆修正した論文を加え、以下の章によって構成されている。

Introduction: Providential Theology and Andrew Marvell (序章：摂理の神学とアンドリュー・マーヴェル)

Chapter 1: The Political Use and Abuse of 'Providence' in the Mid-Seventeenth century (17 世紀中葉における「摂理」の使用と誤用)

Chapter 2: Judgement Hard: Andrew Marvell and Seventeenth-Century Scepticism (困難な判断：アンドリュー・マーヴェルと 17 世紀の懐疑論)

Chapter 3: Destiny and Choice: Marvell' s 'An Horatian Ode upon Cromwell' s Return from Ireland' (運命と選択：マーヴェルの「アイルランドからのクロムウェルの帰還によせるオード」)

Chapter 4: The Meadow and the Woods: Providence, Chance, and Free Will in Marvell' s 'Upon Appleton House' (牧場と森：マーヴェルの「アップルトン館によせて」における摂理、偶然、そして自由意志)

Chapter 5: The Sundial and the Bee: A Philosophical and Political Readings of the Final Stanza of Marvell' s 'The Garden' (日時計と蜂：マーヴェルの「庭」における最終連の哲学的、政治的読み)

Chapter 6: A Dialogue between the Puritan and the Royalist: Who is the Speaker of Marvell' s 'To His Coy Mistress' (清教徒と王党派の会話：マーヴェルの「はにかむ恋人へ」の話者は誰か?)

Chapter 7: '(Perhaps)' in Marvell' s 'Bermudas' (マーヴェルの「バミューダ諸島」における「(たぶん)」について)

Conclusion: Marvell' s Silver Wing and the Marvel of Peru (マーヴェルの銀のつばさとペルーの驚異)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

1. Takashi Yoshinaka, 'Questioning the Value of Prodigies and Wars: Milton and the *Mirabilis Annus* Tracts', 『英語英文学研究』 第 55 巻 査読有 2011 年 p. 19-29
2. 吉中孝志, 「The Book of Mormon を文学的に読むとどうなるか」、『表現技術研究』 第 5 巻 査読無 2009 年 p. 12-31
3. Takashi Yoshinaka, 'Destiny and Choice: Marvell' s "An Horatian Ode

upon Cromwell's Return from Ireland" ', 『表現技術研究』 第4巻
査読無 2008年 p. 25-80

〔学会発表〕 (計2件)

1. Takashi Yoshinaka, 'Questioning the Value of Prodigies and Wars: Milton and the *Mirabilis Annus* Tracts', The 13th International Conference of the Centre for Seventeenth Century Studies, University of Durham, 20 July 2010, Durham Castle, UK
2. 吉中孝志、「The Book of Mormon を文学的に読むとどうなるか」モルモニズム研究会、2008年9月15日、広島国際学院大学

〔図書〕 (計1件)

1. Takashi Yoshinaka, *Marvell's Ambivalence: Religion and the Politics of Imagination in Mid-Seventeenth-Century England* (Cambridge: D. S. Brewer, 2011), 総頁数330頁

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉中 孝志 (YOSHINAKA TAKASHI)
広島大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30230775

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：